

消滅世界 上

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

| | |
|-------------|-----|
| プロローグ | 9 |
| 第一章 物質 | 20 |
| 第二章 謎の遭難者 | 39 |
| 第三章 断裂記憶 | 67 |
| 第四章 妖精の異世界 | 95 |
| 第五章 台湾海軍陸戦隊 | 123 |
| 第六章 ボット | 151 |
| 第七章 戦陣訓 | 179 |
| 第八章 ワイルドカード | 201 |
| エピローグ | 224 |

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。しかし、また妙な任務に駆り出され……。

〔原田小隊〕

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあやか
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。

うるしげらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

い いかけら
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

み どうそう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。

かわにし まさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだぎりしやう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばたくま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あまりひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉の同期。

〈陸上自衛隊 西部方面普通科連隊 (WAIR)〉

しばひかる
司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官。朝霞で婦人自衛官の教育に当たれば一佐に昇進させてやると言われているのだが……。

〔長野県龍野町警察署〕

いわみしんご
岩波伸吾 警視正。警察署長。来年定年を迎える。

かみじやうたくや
上条卓也 警視。副署長。岩波より二〇歳も若い県警の急行組。

やまざきあきら
山崎輝 巡查部長。

みやしたゆりか
宮下友梨香 巡查。二〇歳になったばかりの新米警察官。

らもんまさむね
羅門正宗 准教授。本家サイコップの日本側代表者。専門はリモートセンシング。

とねがわたかし
利根川卓 信州大学の名誉教授。専門は量子理論。

☆謎の存在

えのきだもえ
榎田萌 住人が消えた長野の集落から唯一発見された。目覚めた時には「孔娜娜」と名乗る謎の人物。

〔戦艦大和〕

いちじはやと
伊地知隼人 海軍少将。連合戦隊作戦参謀。薩摩閥。

きむらやすこ
木村康子 技術少佐。博士号を二つもつ才女。

リノミン
李盧民 伍長。衛生兵。

かぐらまくらこ
神楽桜子 主計軍曹。伊地知隼人大佐の従兵。

〔第十七駆逐隊〕

ナムチヨヨン
金主永 大佐。伊地知の部下だったが、今は大佐に昇進し第十七駆逐隊を率いる。

〔特高警察〕

あまかすあきひこ
甘粕昭彦 警部。満州生まれだが特高警察のやり手。外見は風采の上
がらない平凡なサラリーマン。

〔台湾海軍陸戦隊〕

しばあゆむ
司馬歩 少佐。台湾海軍陸戦隊を率いる。日本軍のミスコンでは毎
回優勝を攫う美女。国籍は台湾だが、育ちは横浜。

消滅世界
上

プロローグ

長野県上伊那郡龍野町——。

山肌にへばりつくように点在する集落は、いつの頃からか日香下地区と呼ばれるようになった。はつきりとした由来を語れる人間はもういない。

元は「日香下」ではなく、「日陰」という表記だったらしいが、印象が良くないということで終戦直後に「日香下」という当て字に変えられたようだ。

木曾へと抜ける街道沿いであり、高度成長期には四〇戸ほどの家が存在したが、谷を挟んだ山の反対側にスーパ―林道が開通して以降、すっかり寂れてしまった。いや、バブル期に突入する前に

は、既に働き手は皆集落を出ている。

最後に新築の棟上げ式があったのは、四〇年前のことである。

住民の平均年齢は八一歳。町役場は何度も集団移転を働きかけたが、応じた世帯は皆無だ。最後の若者が集落を出ていった後も、老人たちは自分の家を捨てようとはしなかった。

そして時とともに住民は老い続け、櫛の齒が欠けるように、一人、また一人とこの世を後にした。

「日香下」の名の通り、ここは一日中、ほとんど陽が差さない。山の東斜面に点在する集落には、

日の出直後のほんの一時、光が差すだけだ。

龍野町警察署のミニパトは、つづら折りの登り坂の手前でドライバーを交代した。

今年二〇歳になったばかりの新米警察官・宮下友梨香ゆりか巡査の運転に不安を覚えた山崎輝巡査部長が、焦ったように交代を申し出たのだ。宮下はその態度に不満を覚えたが、運転が特別好きなわけではなかったので、命じられたまま助手席に移動した。

道は対向車とすれ違うこともできないくらい細いが、そもそも対向車が通るような場所ではない。路肩のあちこちには、まだ雪が残っている。最後に降ってから、まだ一週間も経っていないはずだ。車内には暖房が入っていた。この季節、山の上は交互に雪と雨が降る。

カーブが終わり、斜度が緩やかになると、宮下は先ほどの話を続けた。

「——その人形劇には、ワニのかぶり物をした嫌なキヤラがいたんです。そいつが、いつも主人公のお姫様に絡んできて、悪戯いたずらするんですよ。あのキヤラクター、大嫌いでしたね。そういえば、經理しんじの清水さんともその話で盛り上がったんですが、どうしても番組のタイトルが思い出せなくて……」

「君が小さい頃見ていたということは、二一世紀に入ってからの番組だろう？ インターネット上に、情報があるんじゃないか。オタク連中が、サイトとかを立ち上げているのでは」

「私もそう思って、検索はしたんですけど、全然出てこないんです。あんなに長く放映されていた番組なんです……」

「じゃあ、君の母親に聞くのが早いんじゃないの？」

「それが、そうでもないんです。うちの母に聞いて

たこともあるんですが、なに馬鹿なこと言ってるの、そんな番組知らないわ！ と、一蹴いっしゅうされました。小さい頃そこまで熱中していたものがあれば、ぬいぐるみの一つくらい買ってあげているわよ、って。中村巡査なかむらにもその話をしたら、彼女の家はケープル・テレビで東京のチャンネルを全部見られたけど、そんな番組なかったって言われました。だから、不思議なんですよね」

「でもそれ、割とありがちな話だよ。自分が見ていたつもり番組が、実はその時放送されていなかったとか、あとはちよつと違うかもしれないけど、行ったことがない場所の記憶があるとかね。実は、僕もあるんだよ。小さい頃にほんの一年だけ住んでいた家の裏山に、シマウマがいたって記憶がある。それも結構、強烈な記憶なんだ。強い日差しの下でシマウマが草を食はんでいる光景。

——でも僕がそこに住んでいたのは一歳になる前

で、そもそも記憶なんて残っているはずもないんだけどね。まあ、前世の記憶みたいなものかな」
「山崎さんのと一緒にしないでください。私のその番組は、絶対あつたんです。最低でも、三年間は放映されていたんですから。幼稚園でも放送日翌日は、その話で持ちきりだったのに……。どうしてみんな知らないって言うのか、本当に不思議なんです」

左手は見事な溪谷地帯だ。深さは一〇〇メートル近い。ガードレールはあるが、錆と傷だらけだ。
「ここ、事故が頻発ひんぱつしてそうですね」

「そうでもないよ。ここしばらくは、事故の記録はないから。宅配は慣れた麓ふもとの住民任せで、道を知らない余所者が登ってくることはまずない。こんな細い道を使うのは、介護業者のワゴンくらいだ」

「電気はともかく、水道って通っているんでしょ

うか？」

「ああ、下の溪谷からモーターでくみ上げているから、水が溜かれることはない」

「でもトイレは、水洗じゃないですよ」

「どうかな。まあ、コンビニはだいぶ遠いけど、たぶんそこまでの用事はないだろう——」

ようやく集落の戸建てが見えてくる。山崎巡查長がゆつくりとブレーキを踏み込みミニパトを停止させるが、すぐにハンドルから身を乗り出し「なんだ、あれは……」と、絶句するように言った。

道が、見えなくなっていたのだ。前方は、まるで夜のように暗い。山崎巡查長はヘッドライトを灯すと、アクセルをゆつくりと踏み込んだ。

「山崎さん、ここ、何か変じゃないですか」

「いや、変なのはわかっているけど」

徒歩程度の速度で、ゆつくりと近づく。山側には、山肌へばりつくように古い民家が建っている

るが、その半分には人は住んでいないはずだ。朽ちかけている家もあった。

「……全然、先が見えない」

その言葉通り、ヘッドライトを点しているのに、前方が黒い壁で遮断されている。空は晴れていて日差しがあるのに、そこだけ真つ暗なのだ。

「巡查長、ここで止まりましょう！」

「いや、入るしかないだろう。連絡が取れないのは、このせいかもしれない……」

「なおさら危険ではないですか!!」

その暗くなった場所の縁まで二〇メートルほどに近づいて、山崎は再びミニパトを停止させた。

暗闇には、明らかに境界線がある。上は丸みを帯びていて、その真上は明るい。そして地面は、山側が民家を半分ほど飲み込んでいる。谷側はガードレールを飲み込んでいたが、その下がどうなっているかはわからなかった。

「ここは警察無線も通じない。携帯はどうだ？」
 すでに宮下巡査は、自分の携帯電話を操作して
 いた。

「……駄目です。電波は届いていないですね。あの、いったん携帯が通じる所まで戻って、署に指示を仰ぎましょう」

「それはいいが、どう伝えるんだ？」

「画像を送るのはどうでしょうか」

そう言うと宮下は、車内から自身の携帯で外の様子を撮影しはじめた。

「おい、なんでヘッドライトが反射しないんだ？

あり得ないほど真っ暗だが——」

その瞬間、暗闇の中から路上に何かが出てくるのが見えた。まるでホラー映画の一場面のように、宮下は「キヤアー」と悲鳴を上げていた。山崎も「ウッ！」と呻いて仰け反る。

それは、人間の右手だったのだ。

それも、血に染まっていた。続いて、頭も出てくる。顔を上げながら、這いずるようにこちらへ出てきた。

「おい、あの顔、藤森じゃないか!!」

「え!?……ほ、本当だ、藤森さんだ」

その人物は微かに口を動かしているようだが、何を言っているかはわからない。

明らかに、瀕死の状態だ。だが、腰の辺りまで出てきた同僚警官は、まるであちら側から引つ張られるように、あつという間に暗闇に引きずり込まれてしまった。

その時見た唇の動きはわかった。「助けてくれ」だ。

「下がりましたよう！ バックしてください!!」

宮下の声で我にかえった山崎は、ギアをバックに入れ思い切りアクセルを踏み込んだ。勢いがつきすぎてテールランプがガードレールをこすった

が、構つてなどいられない。

バックのまま全速力で二〇〇メートルほど後退し、一度そこで止まる。

しばらく、二人とも声が出なかった。全身も震えている。宮下は、あまりの恐怖に半ベそ状態だ。「と、とにかく、携帯が通じる場所まで下りるぞ！」

山崎は昔の工事現場の資材置き場跡を利用し、ミニパトをUターンさせた。結局、つづら折りのカーブを降りきるまで、無線も携帯も通じない。

山を下りたところで署に連絡を入れ、状況を報告したが、理解してもらうのにまた一苦労だった。

龍野町警察署は、本来ならとくに周辺市の警察署に整理統合されていっておかしくない県内でも最小クラスの警察署だが、ここが生き残り続ける理由を知る者はいない。

署長ポストが減ることを県警本部が嫌ったという噂があれば、冬期の積雪が深く隣接市からパトカーが駆けつけるのが大変だからという話もある。いずれにしてもここは小さな署で、事件も滅多に起こらない。大きなものは、三年前に介護を巡る不幸な殺人事件が起こったくらいだ。もちろん捜査本部ができることはなかったし、捜査の主導自体、隣接市の警察署が担った。

その日の午後、来年定年を迎える警察署長の岩波伸吾なみしんご警視正は、二階の署長室で町内に二つしかない小学校で講演する予定の交通安全指導の原稿に目を通していた。

副署長の上条卓也かみじょうたくや警視がノックをして入室してくる。彼は岩波より二〇歳も若い県警の急行組で、ここでの任期を終えたらすぐに県警本部に戻る予定だ。キャリアに傷を付けることなく無事に戻るのが、岩波の役割である。

幸いここでは難事件は起きそうにないし、破廉恥な犯罪に走り上司を道連れにしそうな問題警察官もない。

「失礼します。あの、ミニパトで出た山崎・宮下組なのですが……」

「ああ、大丈夫だったかい？」

「はい、彼らは無事です。ただ、訳のわからないことを報告してきました」

「訳の……？ 確か、藤森巡査のアパートに行ったんだよな」

「はい。藤森巡査は昨日帰宅した形跡もなく、今朝、別の件の確認もあったので、日香下地区まで走らせました」

「すまない、朝は少し忙しかったから詳しい報告を聞いていないんだが、その別件というのは？」

「今朝の一一〇番通報で、ケアホームの従業員が二人、車に乗ったまま行方不明になっていると連

絡が入ったものです。ホームの説明によると、昨夕、日香下地区の利用者をケアホームの温泉に入れてホームのワゴン車で送っていった後、連絡が取れなくなつたそうです。この業務はいつものもので、ワゴンはマイカー代わりに職員が使うことを許可されているため、昨日はそのまま帰宅したと理解されていたそうです。しかし、今朝二人とも出社しなかつたため、通報してきたとのことでした。職員は四二歳男性と、三五歳の女性。二人とも独身です」

「独身の男女と言うなら、ただの——」

「いえ、ホーム側も最初はそう思ったらしいのですが、ともに携帯が繋がらず、更には送っていった先の老人宅の電話も繋がらないため、一一〇番したとのことでした。携帯の番号はまだ追跡してはいません。それで、藤森巡査の件もあったため、あの地区へとミニパトを走らせていました」

「そもそも、藤森君はなんでそこに行つたんだ？」

「昨夜、役場に勤める者に、日香下地区出身で現在は東京在住の友人から、親が電話に出ないと連絡が入りました。それがうちに回ってきたのです。事件性があるとは思えなかつたので、バイク通勤の藤森巡査に帰宅ついでに見回りを頼みました。

ですがその藤森も、今朝時間になつても出勤せず、携帯も通じなくなっています」

「じゃあ藤森君も、日香下地区に行つたまま帰つていない可能性が高いのか」

「そういうことになりますね。それで、先ほど見に行かせた山崎巡査なのですが、妙な報告をしてきたのです。地区は暗い何かに包まれており、そこから一瞬だけ血だらけの藤森巡査が這い出てきた。だが、彼はすぐに中へ引きずり込まれた。自分たちは慌てて山を降りた、と。……ひとまず安

全運転で署まで戻ってくることを命じたのですが、ふたりは強情に、ここからは動けない、道路を封鎖しないと被害者が増えるのですぐに県警本部に連絡して機動隊とありつたけの武器を用意してほしいとも言っています。支離滅裂ですし、宮下巡査が隣で喚いていることもあり、よく聴き取れない部分もあつたのですが……」

「二人とは、携帯はまだ通じているのか？」

「はい」

「山崎君は、君と同じくらいの歳だよね？」

「自分の方が、二つ上です」

署長は、机の上に貼つてある署員の連絡先一覧から山崎巡査部長の携帯電話番号を探し出してすぐに電話をかけた。幸いにして電話は繋がつたが、藤森巡査の死亡を確認したのかと何度問うても、全く要領を得ない返事しかかえつてこない。

質問を変え、熊でも出たのかと問うと、あれは

絶対熊などではないと明確に言い切った。では何が起こっているんだと聞くと「何も見えない！」と返ってくるだけだ。

もし部下に何かあれば、たとえそれが非番の時であつても一大事だし、二人の警官は明らかにパニックを起こしている。

すぐに署に帰れと命じたが、ここを封鎖する人間が必要だと主張し、絶対に譲らない。そこだけは、なぜか冷静なようだった。やむなく、岩波は電話を一度切る。

「これは駄目だな。申し訳ないけど、誰かを連れて、パトカーで現場に行つてくれるか？ ただし、サイレンは鳴らさずに」

「救急車の手配は必要でしょうか？ もし藤森巡查に何かあつたとすれば——」

「……まずいだらう。同僚を見捨てて逃げてきたとなればね。だが混乱した情報下で、警察が消防

を頼るわけにもいかん。とにかく、一度状況を確認してからだ。一応、ピストルくらい持つていってくれ」

副署長が出動してすぐ、宮下巡査が送信してきたという写真を確認したが、手ぶれが酷く、地面と、何かの影のようなものしか判別できなかった。

上条副署長が乗ったパトカーは、町を抜けるとサイレンは鳴らさず、しかし赤色灯を点して走った。

日香下地区へ登るバイパス沿いの分岐路に辿り着くと、道を塞ぐようにミニパトが駐まっている。山崎・宮下兩名とも、ここで無事合流できた。二人は、想像していたより冷静だった。

山崎巡査部長と運転を交代し、例の現場までつづら折りの山道を登っていく。山を登り切つて車が徐行しはじめると、確かにそれは見えた。

あつたというより、目の前が真つ暗になったのだ。空は晴れていて日差しもあるのに、そこだけ暗闇が広がっている。

その暗闇の縁から五〇メートルほど手前でパトカーを降りた。二〇メートルほど近づくと、路面に血溜まりが見える。何かを引きずったような血糊も、しっかりと残っていた。

だがその影の向こうは、ようとして視界が無い。その縁の部分で、昼と夜がはっきりと分かれていくようだ。

「……山崎さん、そこを動かずに、スマホで動画を撮ってくれる？」

「わかりました。まさか、その中に入るなんて言わないですよね」

「入らない方が安全だろうな」

上条はそこで自分の失敗に気づく。ピストルをパトカーに置いてきてしまったのだ。仕方なく、

道ばたに落ちていた一メートルほどの小枝を拾い、右手に持つ。そして、一〇メートルほどまで接近した。

パトカーに装備されていたマグライトを点し暗闇の中へと向けるが、何の反射もない。マグライトの光は、ただ無限に暗闇の中に吸い込まれていくのだ。

「熊じゃないんですよね」

振り向いて、山崎に質した。

「はい。血まみれの藤森が何かに引きずられていった感じでしたが、あれは熊などではないと思います」

さらに、近づいてみた。まるで黒い壁のようだ。暗闇が、垂直の壁を作っている。五メートルほど近づいたところで、手にした小枝を影の中に投げしてみた。すつと音も無く吸い込まれていく。

続いて小石を拾い投げた。小石は暗闇の手前の

道路で一度バウンドして、影に吸い込まれる。不思議なことに、罅^{ひび}だらけの舗装道路に石が落ちた時には音が聞こえたが、暗闇の中に入ると何の音も返さない。

これは、入っては駄目だという警告だな。

上条は自分のスマホを出すと、周囲の写真を一〇枚ほど撮影した。血溜まりが残る場所の写真も撮る。

血は路面に吸い込まれ、乾きかけていた。この出血量では、助かったとは思えない。

一通り検分を終え山崎のいる場所まで下がると「警察の手に負える事件ではなさそうだ」と漏らした。

「この集落の向こうは、どうなってる？ この道路は、通り抜けできるよね」

「ええ、廃道マニアがたまに走る程度ですが、隣村に出ます。一応、本署の管轄です」

「じゃあ隣村から回り込んで、向こう側も封鎖しないと。交代を呼ぶから、君は宮下君を連れて一度署に戻り、この動画を署長に見せてください」
「警察の管轄でなければ、誰が対処するんですか？」

「さあね。どこかの大学か、自衛隊だろう」

誰かがこの事態解決に答えを出してくれればいいがと、上条は思った。

第一章 物質

陸上自衛隊習志野駐屯地内にぽつんと建つボロ屋には、第一空挺団・第四〇三本部管理中隊の看板がかけられている。

特殊作戦群隷下の特殊部隊サイレント・コアを率いる土門康平一佐は、隊長室の大テーブルに広がる新装備の説明を受けていた。

「これはアメリカ特殊作戦軍も、大規模な採用をはじめたばかりのものです」

ガルこと待田晴郎一曹が、掌に乗せた機械を説明している。

「本体自体は小さくて軽いですよ。SPM——分隊電源管理装置です」

「ケーブルの数が凄まじいな。二〇本はあるぞ」
 「そこは仕方ないですね。廃車のバッテリーから太陽電池、ノートパソコンのバッテリーまで、とにかく何でも繋ぐための道具ですから。間にこのSPMさえ介せば、無線機でもスマホでも何でも動かせます」

「お前には不必要なものだろう」

「ええ。俺は、自分で使う分のバッテリーは自分で持ち歩く主義ですから。でもこれを導入してもおかつかつ分隊で使える電源が増えることになり、世界中のコンセントが利用できるんですよ？」

「ユニバーサル・コンセントなら、成田でも買えるよな」

「ミル・スペックを満たしていません」

「しかし、装備が重くなるし、弾の代わりにもならん。そもそもうちは特殊部隊だ。半日を超える任務なんて、数えるほどだ。バッテリーが尽きる前に作戦は終わる」

隣で聞いていたリベットこと井伊翔いかけろ一曹が

「ちよつと、話が違うじゃん……」と呟く。すぐ承認されるものと、待田が安請け合っていたのは明らかだ。

ここで待田は「あの……これ、俺の提案じゃないですからね。小隊長殿が、どうしても欲しいと言うから」と、背後に立っていた原田拓海はらだたくみ一尉を見遣った。

「いつから君は、メカ屋になったんだね？」

土門が原田に質した。

「自分は、電源が欲しいんです。戦場医療の分野は、PFC——持続的フィールド・ケアという発想に進化しつつあります。何しろ、特殊部隊が活躍するフィールドは、負傷兵の後送に時間がかかり、本来、病院で施すべき高度な治療をフィールドでやらざるを得ませんから。そのためにまず必要なのは、電源ということになります。バイタルを測り、ポンプを動かすための電源です。特殊部隊の兵士一人の育成には、戦闘機パイロットを養成するのと同様のコストがかかりますよね。今はもう、兵隊を使い捨てにする時代ではありません」

熱弁を振るう原田はメディック出身の小隊長で、看護師資格ももっている。

「……時代は変わったな。俺がこの部隊にきた頃は、負傷した兵士を楽にさせるのが指揮官の第一の役割だと教え込まれたが」

「ええ、良い時代になりました。というわけで、代理店から三台、試供品の提供を受けました。明日からの野外訓練に持参します。ゆくゆくは、全部隊に採用を働きかけたいと思います」

「はあ……。また衛生部隊から文句がくるな。おたくの変な奴が、新装備をどんどん買いはじめたせいで現場の衛生隊員にも余計な知恵がついて、あれが欲しいこれもよこせと言いついて迷惑している、とね」

「人民解放軍にすら笑われるような時代錯誤ときごな装備で、国連平和維持活動PKOに部隊を送り出すような無責任な連中なんて、滅びればいいんです！」

「おいおい、うちと違って、衛生部隊の予算は限られている。たぶん、被服より優先度は低い。連中の苦境も察してやれ。野外訓練での使用は許可しよう。判子を付くのは、その結果次第だ」

そこで引き戸がノックされた。隣室の通信指揮

所にいたはずの姜彩夏かあや三佐が顔を出すと、すぐにメモ用紙に視線を落として読み上げる。

「よろしいですか？ 市ヶ谷いちがやから命令です。——速やかに出撃準備を整え、客人を乗せて松本駐屯地まつもとへ向かえ。詳細は不明。現地にて確認せよ。以上」

「立て籠もり事件なら、長野県警にもそれなりの部隊はできているはずだが。それに、客人って誰さ？」

「サイコップの羅門正宗らもんまさむね教授です」

その名前を聞いた土門は、露骨に嫌な顔をして「あちや……」と呻く。

「それで、今度は何なの？ 幽霊ゆうれい？ それとも未確認動物？」

「ご自分で聞いてください。ちなみに現在、臨時ニュースの類いは何も流れていません。私の小隊は明日から四八時間の待機に入りますので、原田

小隊に出てもらおうということでもよろしいですね。野営訓練の準備で全員揃い、糧食含めて準備できていることですし」

「ああ、それでいいが、俺も行かなくやならないのか」

「状況が不明ですし、微妙な決断が必要になるかもしれません」

「まあ、松本なら潜水装備はいらんか。だが、あの人が絡む案件は何が必要になるかわからんかな……。空挺及び潜水装備を送り出せるよう準備しといてくれ。原田小隊に出撃を命ずる。準備でき次第、ここから飛び立つ。姜三佐は、あとを頼む。何かあったら、とりあえず司馬さん呼び戻して諸々頼め！」

「了解です。しかし国内ですし、そう大事になるとは思えません」

「あの羅門先生からのご指名ということは、虎や

龍が出たというレベルの話じゃないだろう。俺は、今回は緑色をした宇宙人が徘徊しているという話をされても驚かないね！」

土門らは、すぐに木更津駐屯地から飛んできたCH-47大型ヘリ二機に乗り込み、海上自衛隊厚木基地から、客人を乗せた哨戒ヘリが到着するのを待った。

SCI・超常現象の科学的調査のための委員会日本支部を仕切る羅門正宗准教授の本業は、衛星を使ったりモート・センシングで、彼が書いたプログラムは、市ヶ谷の情報資料隊でも走っている。自衛隊にも一応サイコップ——超常現象の科学的調査のための委員会——の担当者はいるが、それはお飾りのようなもので、サイコップの専門家たる羅門らにお役所のお墨付きを与えるだけの存在だった。

哨戒ヘリが降りてくると、七〇リットルはあり

そんなザックを背負い、両手にスーツケースを下げた羅門が登場した。

その荷物を回収するため、原田は部下たちを一〇〇メートルほど走らせる。CH-47のローターは回ったままだ。背後のランブドアから羅門が乗り込んでくると、土門は「お久しぶりです」と言いながら彼をシートに座らせ、マイクとヘッドギアも被らせた。キャビンの中央には、指揮通信車として使う軽装甲機動車が一台固定されている。

「急なご指名ですな、羅門先生」

「ええ。僕は昨日まで、地球の裏側にいたんですよ」

カメラマンズ・ベストを着ていた羅門は、確かに陽焼けをしていた。ポケットから折りたたんだB4サイズのモノクロ写真を取り出し、土門に見せてくる。衛星写真だった。

「早速ですが、上の都市が松本、この右下が諏訪

湖です。そして、問題はここ——」

諏訪湖から南西方向の山中に、小さな目印が見える。

「この、黒い点は何かの印ですか？　こんな山中に？　せめて、マジックで大きく×印でも書いてほしいですな。こんなボールペンで叩いたようなものでは、老眼には辛い」

「問題は、まさにここです。これは誰かがつけた目印の類いじゃなく、写っている何か、そのものなのです」

「ほう、宇宙船でも写ったとか？」

「それなら簡単ですがね。ドアをノックして、挨拶をすれば済みますし。これは、もっとやっかいな代物らしい」

ヘリのクルーが、土門に着席するよう要請した。「詳しくは、着陸してからにしましょう」

「警察や大学じゃなく、われら特殊部隊が必要な

のですか？」

「はい。現状では、そう判断せざるを得ません」

どんな巨大な謎にもいつも余裕の表情を崩さない羅門は、そこで深刻な顔で応じた。

ああ……と、土門は嘆息する。この手の異常事態に対処できるのは、やはり自分の部隊だけなのだ。

松本駐屯地に着陸すると、すぐに軽装甲機動車を引っ張り出し、駐屯地の七三式トラックに分乗して19号線に乗って南下した。トラックの前後には、「災害派遣」の旗が張ってある。

サイレンは鳴らさないが、県警のパトカーが先導して速度を上げた。

軽装甲機動車のバックシートに持参した観測機材と一緒に座る羅門が、再度状況を説明した。

「昨日より、集落の住民一七名と、ケアホームの

従業員二名、非番の警察官一人を含む計二〇名が行方不明になっています。現状では、科学的に判明している事実は何もありません。単に昨夕、その集落へと向かったらしいバイクや車両が、ただの暗闇ではない空間に入り、そのまま帰ってこない。バイクで突っ込んだ警官は、脱出を試みて成功しかけたものの、傷だらけのまま、また向こうへと引き込まれたということです」

「過去に類似ケースの報告は？」と、助手席から土門が聞く。

「僕が記憶する限りでは、無いですね。聞いたこともないケースです。ただし、空中でのものでしたら、類似ケースはあったかも。ああ、有名なのは、バミューダ・トライアングルに関する話ですね。トンネル状の雲海に突っ込んで、そこを抜けたら全く別の場所に出たなんて話は、小型機の世界では昔よくありました」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。